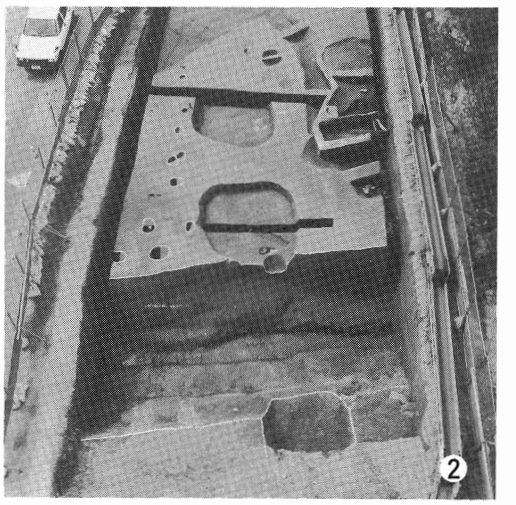
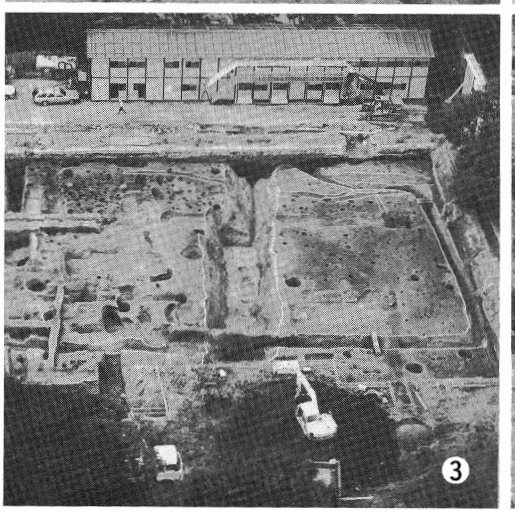
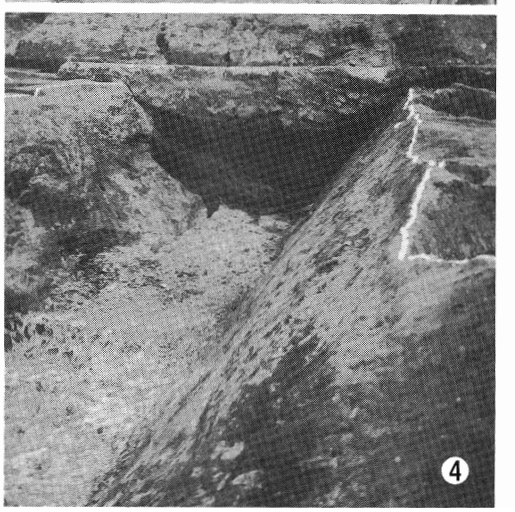
埋蔵文化財 愛知

No.15







戦　国　期　の　堀

15世紀の中頃から16世紀後半にかけては、いわゆる戦国時代と呼ばれ、各地域は戦乱の最中にあり、その中でも尾張は重要な位置を占めていた。現在発掘調査により、各在地領主が廻らせた堀が見つかっており、織田家を中心とした戦国城郭の一端が明らかになってきている。

（①清洲城下町遺跡中堀、②岩倉城遺跡中堀、③④三の丸遺跡　7ページに関連記事掲載）

シリーズ　考古学と自然科学

骨　と　地　震　と

今回は西春日井郡清洲町の朝日遺跡から出土した獣骨と、同じく清洲町の城下町遺跡で発見された地震の痕について述べる。

捨てられた椎骨

貝塚からは時として大量の動物の骨が発見されることがある。それらはほとんど食用となったイノシシやシカで占められているが、中には骨や角を加工して作られた道具、いわゆる骨角器が含まれる。こういった「珍品」は人目を引きやすく、また実際にそのものの持っている情報も多いのでよく研究され、その時代の人々の生活を探る手がかりを与える。

しかし、見つかる骨の大部分を占める、ただ食べられそして捨てられただけの骨でも、よく調べてみると意外に多くの情報を持っているものである。今回はその一例を紹介する。

61年度に朝日遺跡（弥生時代中期）で発掘された動物の骨のうち、現在までに整理の終了した1926点の中から、イノシシとシカの主な骨の出土数を表にしてみた。

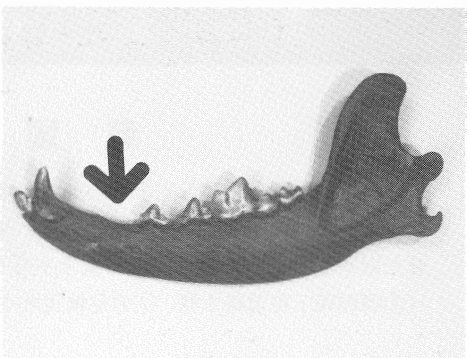
この表で注目していただきたいのは、椎骨の数が、四肢骨や下顎骨に比べて非常に少ないということである。椎骨は1匹に約30個あるから、肢の骨が1個見つかれば少なくとも10個位の椎骨が見つかってもよさそうなものである。イノシシを例に詳しくみると、78個の椎骨のうち約半数の37個が環椎（頭と関節している頸の骨）であり、軸椎（環椎のすぐうしろの頸の骨）も7個発見された。環椎も軸椎も1匹につき1個ずつしかないから、ここには少なくとも37匹のイノシシの骨が捨てられていたことになる。ところが一匹に15個と6個ずつあるはずの胸椎及び腰椎が、それぞれ14個しか見つかっていない。これは一体どうしたことなのだろうか。

	イノシシ	シ　カ
下　顎　骨	68	14
上　顎　骨	95	25
尺　骨	32	15
橈　骨	14	17
肩　甲　骨	55	19
大　腿　骨	43	27
骨	70	26
環　椎	37	8
軸　椎	7	8
第3～7頸椎	3	15
胸　椎	14	5
腰　椎	14	7
仙　椎	3	1
椎骨小計	78	44
総出土数	785個	411個

松井章氏（奈文研）は、貝塚から見つかったイノシシやシカの椎骨が他の骨に比べて少ないのは、椎骨は狩りをした場所に捨ててきたからではないか、ということを講演で話されたことがある。これを朝日遺跡の例にあてはめてみると、骨髄もなく骨角器として利用されることの少ない椎骨は、肉を剝した後その場に捨てられ、切り取った肉や内臓だけを持ち帰ったのではないかと推定される。切り離した頭には椎骨の1～2個がくっついていたことも考えられるから、これで環椎と軸椎の多さも納得がいく。

イヌの抜歯？

朝日遺跡から出土したイヌの下顎骨のいくつかに、奇妙な共通点があった。下顎第2小臼歯



イヌ下顎骨　弥生中期（朝日遺跡）

が欠落しているのである。哺乳類の永久歯は一度抜けると二度と生えてこない。顎の骨には歯の抜けた穴が残るが、しばらくすると骨が成長して穴は埋まってしまうので、歯が生前に抜けたのか死後抜けたのかは容易に判別できる。

朝日遺跡産のイヌの下顎骨13個のうち、生前に第２小臼歯が抜けていたものは７個、しかもこれは下顎骨だけに限られていて、上顎にはその例を見なかった。なぜこのように下顎の第２小臼歯だけが抜け落ちたのだろうか。イヌどうしの喧嘩や、硬い骨をかじって脱落したことも考えられるが、人に抜歯された可能性もないとは言えない。すでに抜歯の風習がなくなっていた弥生時代に、わざわざイヌの歯を抜くというのも奇妙な話だが、当時の人々は何らかの目的があって犬の抜歯を行っていたのかもしれない。

地震考古学的視点

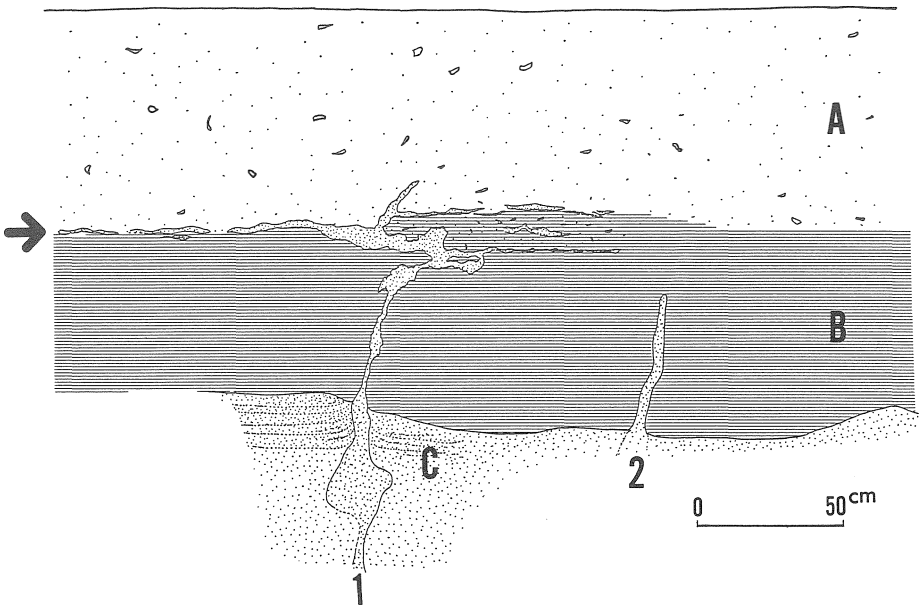
日本は世界でも有数の地震国として知られる。そのため、地震に伴う地変の記録が遺跡中に残されていることも少なくない。地震の記録は、台地上では断層や地割れ、家屋の倒壊・焼失といった痕跡として残る。一方、沖積低地では地盤の液状化（流砂現象）とそれに伴う噴砂・噴泥及び家屋の陥没・倒壊の跡として記録される。

主に織豊期の遺跡として知られる清洲城下町遺跡から、このほど明瞭な地震の痕跡が発見された。平面的には、少なくとも８本の地割れの痕として観察される。地割れの方向には規則性があり、とくにＮ30°Ｗ、幅3.5㎝（平均）の並走する３本の地割れは発掘区の北半分で追跡される。地割れ部分を地層断面で見ると、幅15㎝（平均）、高さ１ｍを超える十数本の「砂の柱」がうねりながら天井層を貫いている様子が観察される。これは噴砂と呼ばれ、軟弱地盤特有の地震災害として近年にわかに注目されるようになった地盤液状化の典型的なタイプということができる。このことから、かつて清洲町一帯に大地震が襲ったことが推定される。

幻の天正大地震

地震史料をもとに、この地域に液状化災害を引き起こした可能性のある地震を選び出してみると、東南海（1944年：昭和19年）、濃尾（1891年：明治24年）、天正（1586年：天正13年）の

（次のページに続く）



天正大地震と推定される噴砂の痕
Ａは16世紀の整地層、矢印は地震時の地表面。１の噴砂が下位（地下水位低下期）から発しているのに注意。（森　勇一原図）

朝日遺跡の縄文時代貯蔵穴

名古屋市

朝日遺跡63A′区で縄文時代後期のドングリピット（貯蔵穴）２基が検出された。

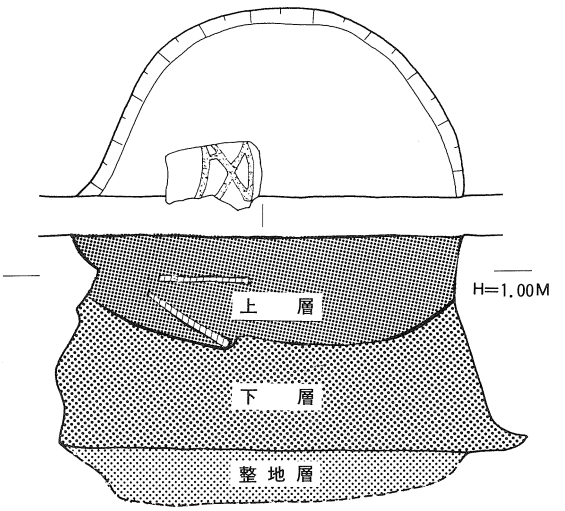
検出地点は谷Ｂの南肩にあたり、海抜１ｍという低地である。２基は谷Ｂに平行して走る溝（人為的に掘られたと考えられる）の底を堀りくぼめてつくられており、溝の方向に平行する形で近接して並存していた。

２基のドングリピットはほぼ同様の規模をもち、開口部径１ｍ、底部径1.3ｍ、深さ0.6ｍを測る。形態は所謂「フラスコ状ピット」である。

ドングリピット内の埋土は上下２層に分かれる。上層はドングリピットが埋められた後、再度土器廃棄坑として利用されたことを示し、下層はドングリの残欠が多数混在して、貯蔵するためのピットであったことを示す。

上層から出土した土器は、バケツ形の深鉢で、器面に磨消縄文文様が明瞭に残っていた。縄文時代に後期前半（堀之内Ⅱ式併行）に属する。

朝日遺跡では以前より縄文土器の出土例があり、61年度の調査で木製杓子の出土もみた。しかし縄文時代の遺構としては今回のドングリピットが初めてである。これにより朝日遺跡周辺に縄文時代の集落が存在していた可能性がより一層強くなった。のみならず、これまで不明な点が多かった濃尾沖積平野での縄文時代の遺跡の立地、形態を考えていく上での貴重な資料を提示したといえる。　（飴谷　一）



シリーズ　考古学と自然科学　**骨と地震と**

三つの地震が考えられる。このうち地元の人々の証言や文献、地層の観察結果から、東南海地震である可能性は消える。残る二地震のどちらであるかは検討を要するところであるが、考古遺物や土層の推積状況から考えて、少なくとも何本かは天正地震である可能性がきわめて高い。（詳細は別稿の予定）

天正地震は、1586年１月18日午後10時頃（天正13年11月29日亥刻）に発生し、近畿・東海・北陸一帯の広い範囲に大被害をもたらした。マグニチュード8.2、倒壊した家屋や寺社14500、死者9000人に達したと言われる。名古屋大学名誉教授の飯田汲事氏（地震学）によれば、震源は伊勢湾と推定されている。この地震で、織田信雄の居城の一つ長島城（桑名郡長島町）は崩壊・炎上し、泥土のなかに埋もれた。清洲付近でも、震度は６～７に達したとされる（飯田氏推定による）。仮りに震度が７に達し、大規模な地盤の液状化が発生したとすれば、清洲城の惨状は目を覆うばかりの状況を呈したと想像される。記録に残る織田信雄による清洲城の大改修は、おそらくこうした事情のもとに行われた地震災害復興事業だったのではなかろうか。

幻の大地震と言われ、古記録に何度も登場しながら、震源の位置さえ定かでなかった天正地震の噴砂の記録が遺跡中から発見されたとすれば、その意義は大きい。地震学はもとより、清洲町一帯の城下町期の編年に、月単位いや時間単位のモノサシを提供できるばかりでなく、地震被害が広範囲に及んでいればいるほど、それだけ広い地域の地層に記録されている可能性があり、新しい時代の良いカギ層として利用できるようになるかもしれない。

（森　勇一・佐藤　治）

市町村だより

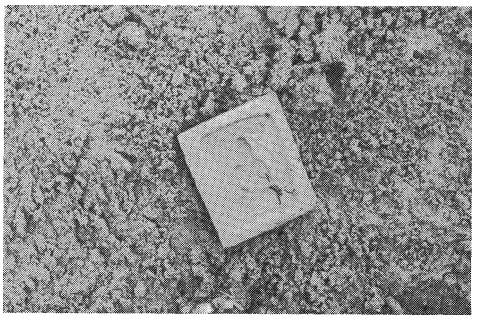
「塼仏型」出土の古窯について

名古屋市教育委員会

「塼仏型」陶器を出土したのは、市内緑区鳴海町字白土に所在したＮＮ259号窯（白土１号窯）であり、同地区の区画整理事業の伴うものであった。調査期間は、７月18日から８月31日までである。調査の結果、ほぼ窯址一基で窯体と灰原に分かれ、約300㎡の面積である。

窯体は、完存していなくて焼成室奥から煙道部までは、農道築造の際に破壊されている。残存長約4.8ｍ、焼成室最大幅1.1ｍであった。

灰原部はそれに比し全存しており、出土遺物の大半はここから採取されている。灰原の層堆積状況は基本的に上下の二層に分かれる。上層からは平安時代中期頃と思われる灰釉陶器と須恵器が混在して出土するに対し、下層からは奈良時代末期から平安初期と推定される須恵器のみしか出土していない。従って、灰原からこの窯は、二次期にわたって焼成されているものと考えられる。然し乍ら上層からは古い時期の遺



物群もかなり出土していることから単純に層区分で分類することはできえない。

「塼仏型」は、窯体南壁外側の地山直上で古時期遺物と一緒に出土すること、また近世期の撹乱を受けていないことからこの窯の古いグループに属するものと思われる。陶粘土を焼き固めたもので、縦4.5㎝、横3.8㎝、厚さ0.9～１㎝の方形を呈したものである。彫られた仏像は高さ2.7㎝の座像一体で、目、衣、光背、天蓋まで描かれている。猿投窯古窯跡群中、この「塼仏型」氾の出土例は全く見られない。

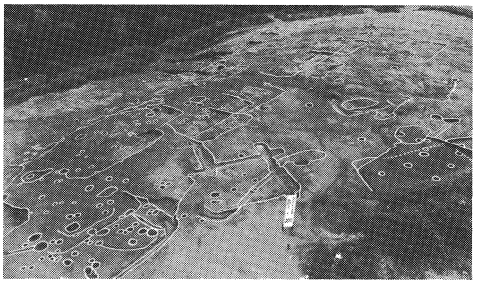
（名古屋市見晴台考古資料館学芸員
平出　紀男）

中　根　山　遺　跡

吉良町教育委員会

幡豆郡吉良町中根山遺跡は、矢作古川左岸下流域の丘陵上に形成された弥生時代後期から古墳時代後期にわたる集落跡である。1987年６月畑地造成のための土取中の発見され、同年の第一次調査に続いて、1988年５月から８月にかけて第二次調査が行われた。

発掘調査によって明らかにされた集落跡は、標高18ｍから36ｍにかけての丘陵頂位や斜面上に営まれていて、竪穴住居群を囲んで大形溝(環濠)がめぐっている。環濠は上巾約２ｍで、遺存状態はよい部分では断面Ｖ字形を呈している。1987年調査区では、東斜面に沿って延長、50ｍ、また、今回の調査では、異る舌状丘陵をとり巻く形で総延長60ｍが検出されたが、両者の中間地形が破壊済みでもあり、連続するものであるかはわからない。環濠内に廃棄された土器類の大



半が、欠山式期から元屋敷式期にかけてのものであることから判断すると、開削時期は山中式以前で、早くも欠山式期のある時期には機能を失いつつあったものとみられる。竪穴住居は、両年度の調査で90軒ちかく検出されていて、現在出土遺物の検討中ながら、最も古いものは高蔵式期に属し、一方最も新しいものは６世紀後半代の須恵器を出土している。丘陵頂位あたりの竪穴住居は、岩盤である風化石英片岩を削り込んで築かれており、また斜面上に作られた住居の中には周壁が１ｍちかいものもある。

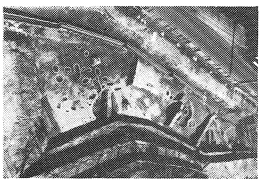
（愛知県埋蔵文化財調査センター　加藤　安信）

発　掘　ニ　ュ　ー　ス

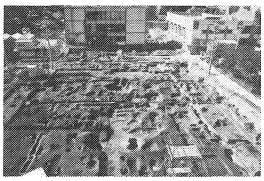
清洲城下町遺跡（五条川河川改修関連・A～C区）　清洲町

C 区 上 面 遺 溝

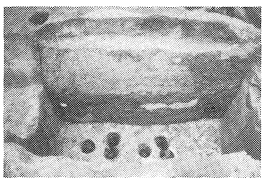
調査区はいづれも中堀の内側に位置し、16世紀から17世紀初めの溝・井戸等を確認。特にC区から、中堀と見られる大溝を検出し、溝底には石が面的に広がっている。また、17世紀後半から18世紀前半の遺構を確認し、そこから陶磁器・漆椀・下駄等が出土した。


B 区 下 面 遺 溝

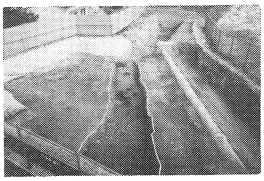
三の丸遺跡（新文化会館用地・A・D区）　名古屋市


D　区　全　景

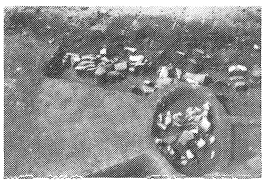
広場、街路を画する柱穴、溝を確認し、それにより二軒の武家屋敷の敷地が確定された。12月現在、江戸時代の調査を終了し、下面を調査中。弥生時代中・後期、奈良・平安時代の竪穴住居、古墳時代前期の一辺25ｍと15ｍの方墳を２基確認している。


D 区 地 下 室

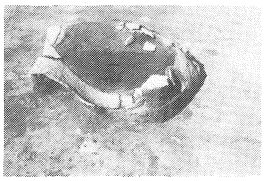
勝　川　遺　跡　春日井市


B区ＳＤ０１(弥生中期)

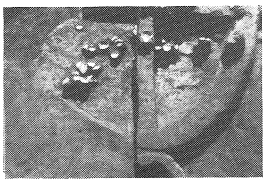
Ａ区では、弥生時代中期の方形周溝墓４基、Ｂ区では、鳥居松面の段丘端に沿って走る中期の溝１条、Ｃ区では、後期に属する多数の土坑等を検出した。Ｂ区の溝は環濠の可能性も考えられる。また、Ａ区では、奈良時代の廃棄土坑を３基検出した。


Ａ区廃棄土坑(奈良時代)

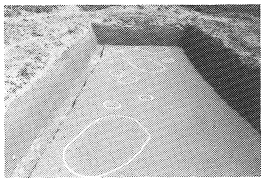
麻生田大橋遺跡　豊川市


縄文時代土器棺

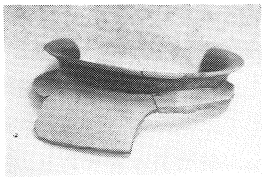
豊川市麻生田町大橋地内で、豊川右岸の洪積台地の東縁に立地。８月末から2000㎡を調査中。現在、縄文時代晩期後半の土器棺53基、中世堀立柱建物、溝、土師皿廃棄土坑等を検出。石斧を主とする石鏃・石棒・石刀・凹石・磨石などの石器の出土量の多さが目につく。


中 世 廃 棄 土 坑

室　遺　跡　西尾市


発 掘 区 全 景

室遺跡は国道23号バイパス用地内の試堀調査によって確認された集落遺跡で、12世紀～16世紀の時期幅を有する。遺跡は沖積低地微高地に拡がる。なお、同じ微高地上の南方30ｍ地点には、同時代の『室城』が存在し、室遺跡との関連が考えられる。


出　土　遺　物

遺跡紹介

三の丸遺跡F区の大溝について

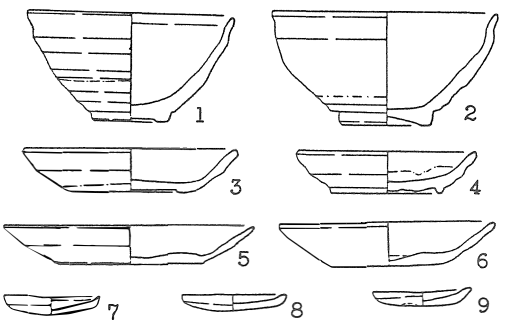
名古屋市

三の丸遺跡F区は、名古屋城二の丸の南に位置する。調査は、名古屋第一地方合同庁舎建設に伴い、昭和63年4月から8月上旬にかけて実施された。

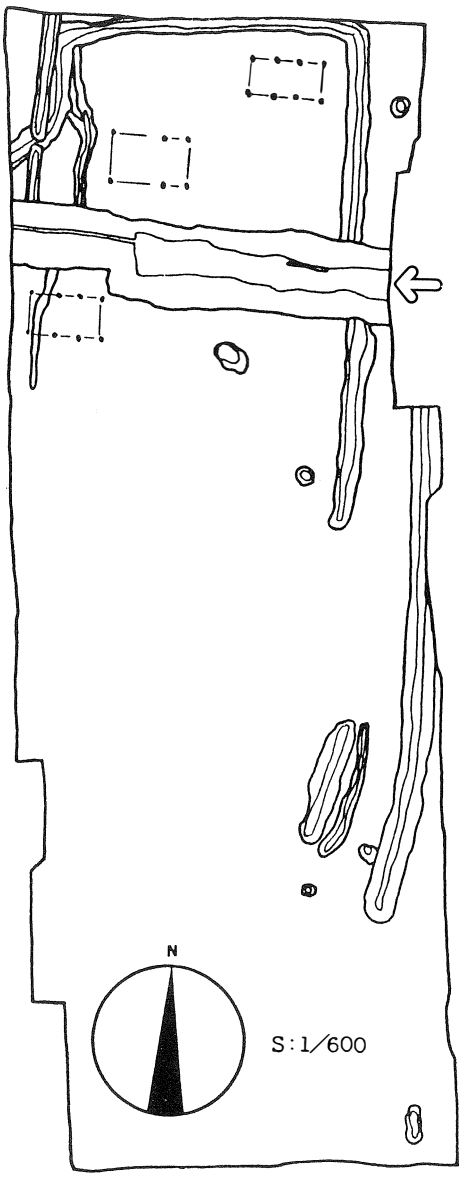
当地区は、江戸時代を通じて武家屋敷であり、それに伴う遺構群が確認されている。その下面から名古屋城築城以前の掘立柱建物、土坑、井戸・溝等が確認された。中でも注目されるのは、調査区北側で検出された東西に走る大溝である。この大溝は巾5～6.5m、深さ3mを測り、西端では断面薬研状を、やや西寄りから東端までは断面箱状をなす。土層及び、箱状の溝底に薬研状の溝の残欠が見られることから、薬研状の箇所を一部残し、箱状に改削したと考えられる。出土遺物は、整地を受けた上層からは16世紀後半から17世紀初めの、中・下層からは16世紀中頃の瀬戸・美濃産の施釉陶器が見られる他、中・下層を中心に、中国陶器、土師器の羽釜・内耳鍋・皿等が出土している。

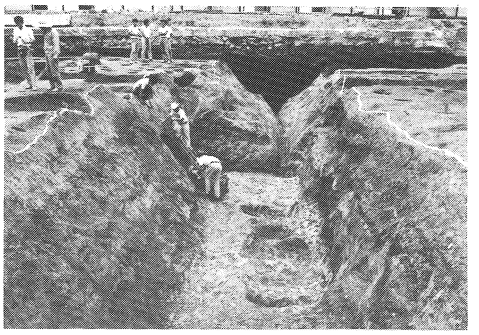
江戸時代に記述された『金城温故録』によると、大永元（1521）年から天正10（1582）年頃に名古屋城二の丸を中心とする周辺に那古野城があったと言われる。大溝の位置、規模、出土遺物の年代から、この大溝は那古野城の堀である可能性が高い。また、大溝の周囲の遺構も出土遺物から見ると、大溝とほぼ同時期であり、大溝と同様、那古野城に関連する遺構と想定できる。

（佐藤　公保）



大溝出土遺物（1～3鉄釉、4灰釉、7～9土師皿）





大　　溝（東より）

センター日誌

専門研修会

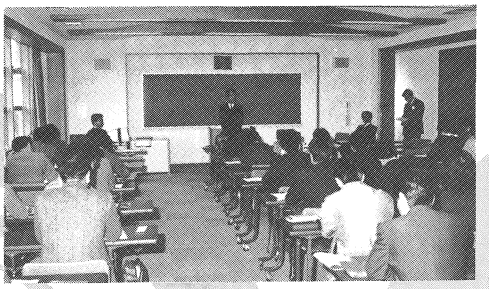
平成元年１月26・27日の両日にわたり、愛知県埋蔵文化財調査センターにおいて、下記の内容で「昭和63年度　専門研修会が行なわれ、延べ26名の参加を得ました。

１月26日

「日本の旧石器文化－発掘調査法・石器分析法を中心として－」
文化庁調査官　岡村道雄

「中世都市遺跡調査の成果と問題点」
国立歴史民族博物館助教授　小野正敏

「水田調査の現状と課題」
三重大学教授　八賀　晋



１月27日

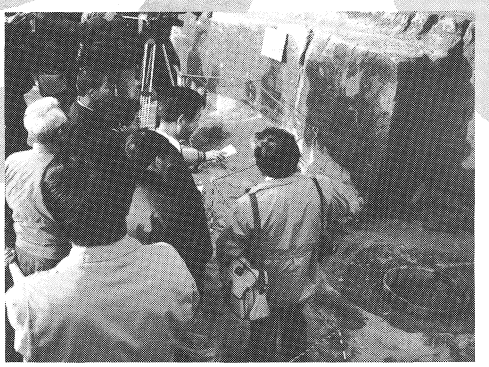
「伊勢湾周辺の竪穴系横口式石室」
南山大学教授　伊藤　秋男

「年輪年代学について」
奈良国立文化財研究所主任研究官
光谷　拓実

現地説明会

昭和63年11月26日
清洲城下町遺跡Ｃ区　150名
・城下町期の中堀・敷石遺構・地震及び噴砂の痕跡、陶磁器類・木製品類の展示。

昭和63年12月17日　300名
三の丸遺跡Ａ・Ｃ・Ｄ区
・弥生～古墳時代の竪穴住居・方墳、奈良～平安時代の竪穴住居、出土遺物展示。



来　訪　者

9・6　吉良町教育長　大渓紀雄氏他２名。
・14　大府市文化財保護委員10名。
10・6　岡山県古代吉備文化財センター３名。
・11　岡山県古代吉備文化財センター４名。
・13　栃木県建設課２名。
・19　刈谷市教育委員会　村瀬典章氏。
・19　名古屋大学教授　楢崎彰一氏、助手斎藤孝正氏。
・22　本センター理事　江本義理氏。
・27　清洲町文化財講座21名。
・31　福井工業高等専門学校　荻野繁春氏。
11・2　清洲町教育委員会　荻須隆裕氏。
・22　半田市立博物館　立松宏氏、岡崎高校教諭　斉藤嘉彦氏、磯部幸男氏。
・24　仙台市教育委員会　太田昭夫氏。
・24　三重県教育委員会　伊藤久嗣氏。
・25　広島県埋蔵文化財センター２名。
・26　本センター理事　伊藤秋男氏、師勝町文化財講座26名。
・30　鳳来町教育長　松下義弘氏他１名。
・30　愛知県教育センター　小笠原昇一氏。

埋蔵文化財愛知　No. 15

発　行　平成元年１月
編　集　(財)愛知県埋蔵文化財センター
〒450　愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802番24
ＴＥＬ　05676－7－4161
印　刷　東海プリント社